

2006年度秋学期教育方法学

最終レポート

チーム番号：B2

0521 - 0134 教育学部教育学科 2回生 池澤 翔

レポートのレベル申告：A 特別加点

このレポートが A 特別加点レベルであると判断した理由

このレポートでは、教科書だけでなく、様々な文献を使い、主体的な学習ができる指導方法やその評価方法を考察してきました。教科書に書いていることだけではない、様々な考えに触れ、それを参考・引用しながら、レポートの作成に取り組みました。また、このレポートの概要が理解できるように、アブストラクトの作成にも取り組みました。よって、このレポートは A レベルであると判断しました。

公開同意書

後輩への公開について：a

Web 上の公開について：a

アブストラクト

私は、佛教大学の教職科目「教育方法学」の授業でチーム学習を通して多様な学習者の主体的な学習を構想した

・全体を通して述べる主張・結論

多様な学習者が主体的に学べる環境とは、個々の目標が存在していることである。目標を設定することで、学習への意欲が向上する。そのためには、その目標を設定することができるシステムや活動を構築していくことが大切である。

本報告では、以上のことを3章構成で説明している。

・第1章では、個々の目標を設定することができるシステムとして、習熟度別クラス編成や副担任制の導入を提案している。また、学校を広く知ってもらうため、保護者、地域への情報公開も学校のシステムの一つとしている。

・第2章では、活動面に重点を置き、読解力向上をテーマとした取り組みを紹介している。目標を持つことができる取り組みとして、「とっておきの本を紹介しよう」という取り組みの提案をしている。

・第3章では、取り組みの評価を述べている。取り組みの成功、失敗は子ども達の姿に表れてくる。その評価方法を提案し、子ども達自身が成長を認識していくために、自己評価ファイルの活用を提案している。

キーワード：目標の設定、読解力向上、評価、習熟度別クラス、副担任制

目次

1章：チームで構想した学校

2章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

3章：学習指導方法の評価と学習者の査定

4章：この講義の感想や希望

難解だった一般用語・専門用語

時期受講生へのアドバイス

参考・引用文献

1章：チームで構想した学校

1. はじめに

(1) 理想の学校づくりについて

今回は、チームで2020年の学校を構想している。今から、14年後であるが、その時の教育現場は、どのようになっているのかは、少し考えづらい所はある。しかし、14年後は、自分たちは学校の中心として働いているだろうし、学校づくりにも携わっているだろう。その中で、理想の学校を考えていくのは、学校を理解していくよい方法のように思う。今回、自分のチームが、考えた学校には、個々の学力の伸長、地域連携をコンセプトとしている。詳しい内容は、次に示していく事とする。

2、構想した学校の教育方針・特色

・サナギ小学校教育方針

個々の学力を伸長させることができる教育システム作り

この教育方針は、子どもたちの学力を一律的に上げるのではなく、個々で学力や理解度が異なり、その学力や理解度に差があることから、学力の二極化が生まれてくるのである。サナギ小学校では、一律的に子ども達の学力を向上させていくのではなく、個々に対応しながら、学力を伸ばしていくことを目標とする。その目標を達成するために、3つの教育システムを導入した。習熟度別クラス編成 副担任制 教科別担任制である。この3つの教育システムを利用し、個々の学力の伸長を図る。

家庭・地域に開かれた学校づくり

学校は、家庭・地域の協力が欠かせない。そのためには、学校が家庭・地域に開かれたものでなくてはならない。学校を開かれたものにしていく4つの方針をここに示していく。

学校の情報公開 PTAとの連携 学校安全の確保 地域からのフィードバック以上の4つである。学校は、閉鎖的な空間になりがちである。それでは、家庭・地域からの信頼を得ることはできない。その上で、家庭・地域に学校をもっと知ってもらおうとする姿勢が大切である。サナギ小学校は、そんな学校を目指していく。

以上が、サナギ小学校の教育方針である。その教育方針を実現していくための、具体的な諸策を検討していく。

・サナギ小学校の2つの柱

学力面の充実

ここでは、子ども達の学力面の充実に向けた具体的な諸策を検討していく。先ほど、取り上げた3つの教育システムを順に検討していく事とする。

習熟度別クラス編成

サナギ小学校は、1クラス30人が2クラス、1学年60人の計360人の規模である。その規模を活かすために、国語、算数、理科、社会では1クラスを半分にした習熟度別クラス編成としている。各クラスの学習内容に関してだが、1つは、基礎・基本クラスである。このクラスは各学年で、最低限習得しなければならない内容を中心に授業を進めていく。状況によっては、少し高いレベルの事に取り組みせるなどの幅を持たせながら取り組んでいく。もう一つは、発展的クラスである。このクラスは、基本を習得した上での応用的な内容に取り組んでいくクラスである。このクラスでは、個々に習得の差が生じるので、教師が個々に対応していく。クラス編成であるが、普段の授業での習熟度や子どもの希望などを判断基準として、総合的にクラス編成をしていく。クラスの中にも、個々の習熟度に応じた指導をしていくことができるのが、習熟度別クラス編成のメリットであると言える。

副担任制

副担任制は、一つの学級を複数の教師がみる制度である。先ほどの習熟度別クラス編成の際、担任と副担任が共同して担当していきます。複数の担任がクラスを見ることで、クラスの児童をより把握しやすくなります。お互いの教師が見た児童の様子や習熟度などの情報を共有化していき、授業や生徒指導に活かしていく。

教科別担任制

英語、体育、家庭科、図工、音楽では、教科担任制を導入している。小学校では、担任が全ての教科を受け持っているが、どうしても広く浅い指導になりがちである。教科担任制を導入することで、より専門性のある授業を受けることが可能になります。それにより、個に応じた指導も可能になってきます。また、担任だけでなく、様々な人と接することで、多くの人間性に触れることが期待できる。

開かれた学校

学校の情報公開

学校の情報公開をしていくことは、家庭・地域からの信頼につながっていく。学校の行事や取り組みをHP上や紙面で、公開していく。保護者には、子どもの学校での様子をより把握できるように、子どもの様子などが書かれているメールを各家庭に送っていく。その

時に、担任に質問があれば、メールで返信をすることができるシステムを導入している。こうすることで、学校と家庭のコミュニケーションがより円滑にできることが期待できる。

PTA との連携

PTA との連携も、学校にとっては重要になってきます。具体的には、月単位による学校と PTA による意見交換会が具体的方法である。学校の問題点、その改善法を学校だけでなく、PTA と共に考えていく場です。これにより、PTA に、学校に対する関心を高めることができ、学校との信頼関係をより強くしていくことができる。

学校安全の確保

学校安全の確保は、今や必要不可欠となっている。ただ、あまりにも学校安全にこだわってしまうと、閉鎖的な学校になりかねない。ここでは、地域との協力による学校安全を考えていく。具体的な方法として、登下校時の通学路内で、ボランティアによる監視をしていく。通学路内で常に子どもを見ることができる体制を作っていく。また、不審者が見分けられるように、あらかじめ、地域住民に利用登録をしてもらうことで、不審者との区別をつけるようにします。利用登録は、顔写真と名前、住所を申請すれば、いつでも学校に出入りすることができる。こうすることで、学校側は利用者の把握することで、不審者に対する対応を素早いものとするすることができる。

地域からのフィードバック

地域からの声を聞き、反映させていくことも、学校の発展につながっていきます。具体的には、学校に対するアンケートを利用する。そのアンケートから、地域の声を聞き、学校として、どのような行動をしていくのかを示していくことで、地域との連携を強いものとしていくことができる。

2 章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

項目 A 「多様な学習者」の定義

自分が考える「多様な学習者」とは、勉強に対する意識の違いがある学習者である。その背景として、学力の二極化傾向や学ぶ意識の低下が挙げられる。その理由は、学力の二極化傾向により、学力の低い子の学力向上に対する意識の低下、勉強の楽しさを感じられないことや目標がなく、何をすればいいのかが見えづらくなっているのが、学ぶ意識の低下につながってきているのではないかと考えられるからである。

項目 B 「多様な学習者の主体的な学び」のメタファ（隠喩）

自分が考える「多様な学習者が主体的に学ぶ」とは、サッカーのようなものである。

その理由は、ゴールを決めるポジション、ゴールを守るポジションなど様々である。勝利という共通の目標、個人的な目標に向かって主体的な取り組みがなされていると考えるからである。

項目 C 日本の子どもの読解力の実態と読解力の定義

・読解力とは、文科省ホームページの読解力向上に関する指導資料(1)において、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力と定義している。

・文科省ホームページの読解力向上に関する指導資料によると日本の子どもの読解力は、低下してきている。また、PISA(生徒の学習到達度調査)において、「テキストの解釈」「熟考・評価」とりわけ「自由記述」の問題を苦手としている。つまり、「読む力」だけでなく、「書く力」や特に「考える力」が低下していると言える。

項目 D 具体的な学習指導方法のテーマ

ここでは、学習指導方法の具体的なテーマを考えていく。

今回は、小学校5年生の国語科教育における読解力向上の取り組みについて考えていきたい。具体的に、どのような力を伸ばしていくかであるが、3つの力を身につけさせたいと考えている。

「話す力」「書く力」「読む力」である。これは、どうしても個々によって差があるため、平等に力をつけさせるのは、難しい。そこで、個々に応じた対応を考えたい。その方法として、習熟度別による少人数授業がある。

これを行う上での留意点を示していく。

しっかりとしたクラス編成を行っていくために、テスト結果だけでなく、授業態度や本人の希望などを基に、なるべく子どもからの不満がないような対応をしていくこと、そして、子ども自身が目的意識を持って日々の授業に取り組めるような働きかけを同時に行っていくことも大切である。

習熟度別による少人数授業に保護者が理解を得られるようにしていくことが求められる。学校は、保護者の協力により成り立っている側面は大きい。そのために、保護者に対して説明をしていくことが大切である。具体的には、習熟度別による少人数授業の目的、クラス編成などが挙げられる。

クラス間の進捗状況や単元内容に関することを教師の間で、しっかりと情報を共有し

ていくことが大切である。

以上が、習熟度別の少人数授業の留意点である。次に、どのような学習活動をしていくのか、どのような成果を身につけさせる必要があるのかを次の項目に述べていく。

項目 E 学習指導方法のモデル

ここでは、学習指導の具体案を示していきたい。次の項目に分けて述べていく。

- ・学ぶ意味 (Meaning) ・学習活動 (Action) ・学習内容 (Contents)
- ・学習環境 (Environment) ・学習用具 (Tool) ・学習成果 (Outcome)

・学ぶ意味 (Meaning)

ここでは、国語科教育をテーマにした学ぶ意味を考えていきたい。勉強をすることは、何かを知りたいという行為、考え方を学ぶ行為だと思っている。例えば、国語で言えば、言語を知らなければ、人と生活していくのは難しいし、何かを知っていくことはできないと考える。特に、読解力は文を読んで理解する力である。社会には、言語が溢れている。テレビや本、インターネットでも、文を読んで理解できなければ、新たな知識の獲得にはならない。人は、誰しも何かを知りたいという欲求がある。その欲求を満たしていくことに学ぶ意味があるのだと考えている。

・学習活動 (Action)

読解力向上に向けた学習活動を考えていきたい。小学5年生という発達段階から考えると、言語活動にかなり慣れてきていると見てもよい。読解力とは、「話す力」、「聞く力」、「読む力」の3つを総合した力だと言える。その3つの力を育成する取り組みとして、本校、京都市立さなぎ小学校では、第五学年の国語科教育において、『とっておきの本を紹介しよう』という取り組みをすることを提案する。具体的には、児童一人一人が、自分の好きな本を一冊ずつ選択し、その本の内容を友達に紹介するという目的で、発表に向けて個々の方法でまとめていくというものである。

与えられたものではなく、学びを児童が自分のものにしていけるよう、今回の取り組みでは、あえて教科書を使わず、図書館などを利用して、自分が推薦したいと思う本を選ぶところから学習を始めたいと思う。教科書を用いた学習では、どうしても学習のねらいを教師だけが把握しているという状況になりがちだが、この場合、自分の選んだ本を紹介しようという個々の目標が、児童自身にもしっかりと把握される。このような点から、この取り組みは、学習者の多様性や主体的な学習に充分に対応できると考える。

成果を表現する方法としては、最後に、模造紙を使ったりプリントをつくったり、その

他の児童独自が表したい形にしたものを用いて、授業の中で『本の推薦大会』という形でみんなに発表する形式をとる。

この取り組みの魅力は、まず、本一冊を自分で読み深め、その本の良さなどを人に伝えることができるように、大切な部分をまとめたり、作者の意見を正確に読み取ったりしていく作業の中で、読解力の向上を図ることができるということだ。そして同時に、この過程では、言葉の意味や漢字を調べる方法、図書館の利用方法、本の種類や目次の見方などを学習していくことができ、今後のほかの授業や単元の学習につなげることができる。また、クラスの中で個々が一冊ずつ調べを進めているという環境は、児童の本への興味につながり、最終的に、友達の本の紹介の発表を聞いていくということも、更なる幅広い読書への意欲につながると考えられる。この取り組みでは、活動の中に「読む力」、「書く力」、「聞く力」の育成が組み込まれているのが特徴である。本を読むという作業の中に、「読む力」の育成につながり、要約という作業を通しての「書く力」の育成、そして、発表を聞くことでの「聞く力」の育成につながっていく。この活動を通して、読解力向上を図っていく。では、この活動に必要な知識や技術を次項に示していく。

・学習内容 (Contents)

ここでは、「読む力」、「書く力」、「話す力」の育成に向けての知識を整理し、その習得する方法を考察していく。「読む力」、「書く力」、「話す力」の3つの分野で、学習指導要領では、具体的な指導項目は書かれていない。ここでは、小学5年生における具体的な指導項目を示していきたい。

鶴田(2001)は3つの指導項目を系統的に示している。(2)

「話すこと・聞くこと」の指導項目

- ・必要なことがら何かを考えて話す ・相手や場に応じて、丁寧なことばで話す
- ・相手や場に応じて、声の大きさや速さを工夫する ・絵や展示物などを活用して話す
- ・ことがら相互の関係に注意して話す ・中心点がわかるように話す
- ・根拠や例の言い方に注意して話す ・筋道をはっきりさせて話す
- ・ことばの抑揚・アクセントを工夫して話す ・語尾まではっきりと話す
- ・常態と敬体を使い分けて話す

「書くこと」の指導項目

(1) 表記の技術・・・漢字の使い方、仮名遣い、句読点

(2) 取材・選材・主題の技術・・・題材を探す技術、題材を探す技術、

(3) 構成の技術・・・段落にまとめる技術、構成の技術

(4) 記述の技術・・・一文作文の技術、むだのない作文の技術、事実と意見を振り分ける技術、要約して書く技術、

「読むこと」の指導項目

- ・全体構成を明らかにする
- ・作品の象徴性や思想性をとらえる
- ・中心人物をとらえる

以上を国語科教育における指導項目として、整理しておく。ただ、教え込むだけでは、知識の定着や理解力は向上しない。具体的な方法として、教師の発問がある。その発問について、加藤(2006)は「学習意欲を高める授業」の中で、「一つは、授業の中で学び方そのものを説明していくことである。学び方を取り立てて教えていくあり方である。二つには、発問を通して学び方を教えていくことである。教科内容によっても異なるが、発問は定式化していくことで学び方を教えていくことができるものである。(中略)発問そのものを授業を通じて生徒に意識化させ、そのことでなぜこのように先生は問うたのか、このように問うことにどのような意味があるのか・・・といったことを生徒に考えさせていく。そこでは当然のことながら、生徒の注意を発問そのものに向けていくことが重要である」と述べている。(3)ここから、分かるように、知識を教えるだけでなく、子どもに考えさせることのできる発問をしていくことが大切である。

・学習環境 (Environment)

ここでは、学習環境について考えたい。学習環境により、取り組みに対する効果は変わってくる。ここでいう学習環境は、教室の意識レベルのことである。何事にも、そうであるが、一人の力よりも大勢の力が作用すれば、大きい成果が得られる。それには、子どもたちに取り組みに対する意識づけが大切である。例えば、百ます計算では、全員が過去の自分のタイムに挑戦することで、学力の伸びを自分自身が感じる事ができた。今回の読解力向上の取り組みでいえば、お互いの発表を聞くことで、友達の良い所を見つけたり、自分の発表を見てもらい、見てもらっているという意識を持つことで、学習の意欲の向上につながっていく。一例ではあるが、このような方法で、取り組みに対する効果をよりよいものにすることができると考えている。

・学習用具 (Tool)

次に学習用具であるが、図書室で、本を探すので、本の充実や把握は欠かせない。

そして、発表では、発表用紙の用意をする。そうすることで、どのような内容を発表すればよいのかを理解することができる。このように、子ども達が活動をしやすいように学習用具を整備することが大切である。

・学習効果 (Outcome)

学習効果について考えたい。ここでは、読解力向上の取り組みの目標が、それにあたる。自分は、学習効果を、自分の考えを整理する能力を身につけること、人に分かりやすく伝える能力を身につける、情報を読み取る能力という3点であると考えた。その理由は、一つずつ述べていく。

・自分の考えを整理する能力・・・自分の考えを整理する時、言葉や言語を使う。言葉や言語を習得はできても、使いこなせなければ意味がない。書いたり、言葉を発することで、自分の考えを明確にしていくことは、生きていく上で必要なことである。成長段階にある子どもたちは、その訓練は絶対に必要であると思う。

・人に分かりやすく伝える能力・・・人間は一人では生きていけない。それは、至極当然のことである。生きていくには、協力が必要である。協力するために、必要なのが人に自分の意思を伝え、理解してもらうことである。この能力が欠ければ、信頼関係は築けない。自分は分かっている、他人は分かっていないことはよくある。それをいかに伝えていくかを考えていく必要があると思う。

・情報を読み取る能力・・・本にせよ、他人の言っていることにせよ、情報を読み取るとは、自分の知識を増やし、考えを深めていくことになる。情報を理解しなければ、人は成長していかないと思う。その情報を基に、考えを導いていくのだと考えている。そういう意味でも、身につけるべき能力だと思う。

以上が学習効果であるが、国語科教育は、人と生きていく最低限の能力を身につける教科だと思う。読解力をあげることと連動して、子どもの育成につなげていくことが大切であると思うのである。

3章：学習指導方法の評価と学習者の査定

項目 A どのような状態になったとき、開発した学習指導方法は成功したと判断できるか
ここでは、理想の学習指導方法、つまり、成功したといえる学習指導方法を考察していく。チームで、統一した学習指導方法は、「とっておきの本を紹介しよう」という取り組みである。その流れと、期待できる効果を以下に述べていくこととする。

最初に、本を選ぶ所から始まるわけだが、様々な文章に触れさせるため、教科書は使わず、

図書室で各自、本を選ばせるようにする。本を選ぶ際の教師の支援としては、いくつかのお勧めの本をピックアップし、どのような本があるのかをある程度、把握させるようにする。本を選べば、要約の作業に入る。要約の際、登場人物はどのような人物で、何をするのか、どのような出来事があるのかを述べるようにするなどの約束事を設けるようにして、要約をしやすいように心がける。また、発表方法も、ある程度、提示して選ばせるようにしていく。例としては、模造紙による掲示、新聞形式にして全員に配るなどが挙げられる。発表をし、意見や質問を述べるようにする。その時、発表内容に関しての話題を提供して、意見や質問がしやすい雰囲気を作るようにしていく。以上がこの活動の流れである。

この活動の学習効果として、自分の考えを整理する能力、人に分かりやすく伝える能力の2つが挙げられる。具体的な成果としては、クラス全体の意思疎通がしっかりとできている様子が見られたり、作文や感想文でも「おもしろかった」、「楽しかった」などの抽象的な感情だけでなく、何が楽しかったのか、どうしておもしろかったのかを具体的に述べることができるようになっていくことが挙げられる。また、本を紹介するという取り組みの中で、本に対する興味を持たせる効果が期待できる。そして、この活動の大きなメリットは、活動の過程の中で、言葉の意味や漢字を調べる方法、図書館の利用方法、本の種類や目次の見方などを学習していくことで、今後のほかの授業や単元の学習につなげることができる点である。これにより、他の授業と結び付いた学習が可能となる。

これが、この活動の理想とする形である。

項目 B 開発した学習指導方法の実践において予測できる失敗例（最悪のパターン）

ここでは、学習指導方法の失敗例を考えていく。開発した学習指導方法は、完璧ではない。メリット、デメリットが存在する。項目 A では、メリット面を中心に述べ、想定していた目的を達成できた場合を述べてきたが、ここでは、デメリット面について考えるとともに、デメリットにより、学習指導方法がもたらす効果がほとんど見られなかったというパターンを考察していく。

この活動の流れの中では3つの失敗が予測される。一つ目は、この活動に意欲的でない子どもへの対処の失敗である。本が好きな子どもは意欲的に取り組むことができるが、そうでない子どもは必ずしもそうとは限られない。そんな子どもに、無理やり取り組ませようとすると期待できる効果は得られない。ただ、何となくやって、終わりという無意味な活動につながってしまうことが考えられる。二つ目は、要約での支援の失敗である。例え

ば、要約ができない子どもがいたとする。最悪の支援としては、全ての内容を教師が答えてしまうことである。全て言ってしまえば、それは要約の作業ではなく、聞き取りの作業となってしまう上、内容に関する理解も薄くなってしまふ。これを繰り返していけば、結局、子ども達は教師に頼ってしまい、自分では何もしなくなってしまうことが考えられる。三つ目は、発表をしても、意見や質問がでなかった場合の対処の失敗である。意見や質問がなければ、発表を聞く意味がない。それでは、聞かない子どもが出ることも予想される。この事からも意見や質問が出やすい雰囲気をつくることは非常に重要となる。活動の中にも、失敗は出てくる。いかに修正できるかが重要である。最悪のパターンは、失敗が連鎖して起こり、この活動の意義が薄れてしまうことである。具体的に言えば、子ども達がこの活動に楽しさや意味が見出せない上に、本に対する興味も薄れ、要約や作文で苦手意識ができてしまい、書くことが嫌といった様子が見られるようになってしまふことが挙げられる。そして、この活動の大きなデメリットは、活動が一時的になりやすい点である。つまり、子ども達にしてみれば、この活動は何の意味もなく、ただ、やっただけという感じがあるのである。どのようにすれば、継続的な活動になるのかも、この活動の課題点であると言える。以上が、この活動の失敗例である。

項目C 何をどのような方法で調べることによって以上のような判断ができるか

・何を調べるか

ここでは、成功した状態、失敗した状態の判断基準を考察する。成功と失敗は、表裏一体である。一つの取り組みの成否により、全体の出来が大きく左右される。では、具体的には、何を調べればよいのか？やはり、成功したか失敗したかは、子ども達の様子から見えてくる。そこで、子ども達にアンケートによる調査をすることで、この活動が子ども達にとって、どうだったのか？効果はあったと言えるのが見えてくると考えた。調査は、この活動を通して、子ども達がどのようなことを感じたのかを調べ、そこから、この活動の学習効果を見極める意図がある。具体的な質問項目は以下のように設定する。

- ・この活動をやってみて、どのように感じたか？
- ・本に興味を持てたか？
- ・要約という作業を通して、変化はあったか？

この項目は、考えられる学習効果を踏まえた項目となっている。次は、このアンケートを踏まえ、具体的な評価方法について考察していく。

・どのような方法で調べるか

上に述べたアンケート調査による客観的な評価をするのも、一つの方法であると言えるが、

それだけではなく、子ども達の実態を見て、評価する方法と組み合わせて使っていくのがよいのではないかと考えた。吉崎(2004)は「パフォーマンスに基づく評価」を提案している。具体的な方法は、あらかじめ評価指標を作成し、ある課題や作業を通して、その評価指標に沿って客観的に評価することができるのである。課題によって、典型的な行動や形跡がある。それをひとつの基準として評価していくのである。(4)この活動での、具体的な基準は、「要約ができている」では、項目ごとにわけて要約ができたり、話の流れから、要約ができているなどが挙げられる。また、評価する側の意識として、黒澤(2004)は、「本当の教育評価とは何か」の中で以下のように述べている。「『見取る』には、目標を意識しながらも、子どもの様子をまずは見て取るうという意味が込められている。すなわち『見取る』という行為には、目標を押しつせず、まずは子どもがあるという基本的な指導者の態度が込められている。端的に言うならば、はじめに『目標』があるのではなく、はじめに『子どもありき』というわけである」(5)これから言えることは、基準というのは不変ではないのである。ある程度、指導者が考えた評価項目を決めておく必要があるが、子どもたちの様子により、評価項目は変わってくる。なので、常に修正が必要なのである。この評価により、成功か失敗かのある程度の判断基準ができるだろう。

項目D 学習者はどのような方法によって自分の進歩を確かめることができるか

・あなたは今までどのような方法で自分の進歩を確かめてきたか

自分が、どのような方法で進歩を確かめてきたかを考察していく。方法は様々であるが、自分が進歩を確かめた方法は、過去の自分を基準として進歩を確かめるようにしてきた。例えば、文章問題を解くとする。解いた時に、どこができなかったのかをチェックし、次に同じ問題を解く時に、そこできているかで進歩しているかを確かめていた。長いスパンで見れば、ある単元ができなかったが以前と比べるとできるようになっているのも、一つの進歩だと言える。このように過去の自分と比較して、今の自分の位置や状態を確かめるようにしながら、日々、努力していたのである。これが、自分の進歩を確かめる方法である。

・チームで構想する学習指導を受ける学習者は、どのような方法で自分の学習達成度を確認できるか

ここでは、学習者自身が、学習達成度を確認できる方法を考察していく。やはり、有効的な方法として、自己評価がある。具体的には、「ポートフォリオ評価」というのがあるが、その評価法の基本的な性格について、寺西(2003)は、「確かな力を育てるポートフォ

リオ評価の方法と実践」の中で、次のように述べている。

「ポートフォリオは、一人ひとりの子ども自身の思いや学びの姿が集積されたその子自身の『成長ファイル』つまり『自己成長ファイル』であり、比較的長期的な学びや成長記録として、様々な記録が集められたものである。そこから子どもの『学びの姿』や『学びの軌跡』が見て取れる『ある目的のもとに集積された学習ファイルやフォルダー』をいう」
(6)これが、ポートフォリオ評価法の基本的な性格である。具体的には、一つの活動ごとに自己評価をしていき、自分の取り組みはどうだったかなどを記入していく。また、今日やった活動の記録はファイルに綴じていくようにする。そして、発表では友達からの評価を受ける。相互評価をしていくことで、自分を見てもらうという意識がもて、さらなる変化へのきっかけをつくることにもなる。そして、その自己評価や友達からの評価を教師側がコメントなどを載せていくようにする。そして、評価基準を基に評価をしていく。また、ファイルの内容を親が評価していくことも子どもにとってはプラスとなる。親からも見られているという意識がある上、自分をより知ることができる。

評価は自分が成長するためのものである。人のランクづけのためにあるのではない。そのことを意識していくことが大切である。」

4章：この講義の感想や希望

難解だった一般用語・専門用語

時期受講生へのアドバイス

・この講義の感想や希望

この講義で、自分にとって、意義のあったことは、学習指導方法を考えるという事でした。今まで、個人個人で授業を構築していくことが多かったが、今回は、学校全体の取り組みとして、考えるということだったので、今までにない活動だったように思う。また、レポート作成を通して、様々な文献を読む機会があったのも、新たな知識や考えを知る良い機会であったので、この講義は、自分にとって、プラスになったように思います。また、この講義は、チーム学習という形で進んできたが、チーム学習は難しいと感じました。その理由としては、チーム全員の共通理解がなければ、事態が進まないという点です。共通理解があり、何をすべきかを全員が理解すれば、事態はスムーズに進みますが、一人でも、それができていなければ、進まないの、そういった情報共有する難しさを感じました。この学習を子ども達に取り組んでもらう時に、そういった経験がいかにせればよいなと思います。

・難解だった一般用語・専門用語

メタファー、ポートフォリオ、

・時期受講生へのアドバイス

この授業でのポイントは、いかにチーム内で情報を共有できるかということです。情報を共通理解し、何をすべきかを理解すれば、チーム学習はかなりスムーズに進みます。逆に、それができなければ、かなり苦しいです。チーム学習は、誰一人として欠けても成立はしません。やることは、難しい部分はあると思いますが、チーム全員で考えながら、何をすべきかを理解するようにすれば、うまくいきます。頑張ってください。

[参考文献・引用文献]

(1) 文 科 省 ホ ー ム ペ ー ジ の 読 解 力 向 上 に 関 す る 指 導 資 料
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201.htm (2 0 0 6 年 1 1

月 2 1 日 ア ク セ ス)

(2) 日 本 教 育 方 法 学 会 編 著 (2 0 0 1) 学 力 観 の 再 検 討 と 授 業 改 革 図 書 文 化 社

(3) 日 本 教 育 方 法 学 会 編 著 (2 0 0 6) 意 欲 を 高 め る 授 業 - ど の よ う な 学 力 を 形 成 す る
の か - p. 9 3 図 書 文 化 社

(4) 西 之 園 春 夫 ・ 宮 寺 晃 夫 編 著 (2 0 0 4) 教 育 の 方 法 と 技 術 ミ ネ ル ヴ ァ 書 房

(5) 黒 澤 俊 二 著 (2 0 0 4) 本 当 の 教 育 評 価 と は 何 か 学 陽 書 房 p. 1 1 6

(6) 寺 西 和 子 編 著 (2 0 0 3) 確 かな 力 を 育 て る ポ ー ト フ ォ リ オ 評 価 の 方 法 と 実 践 p. 8